

論文要約

介護老人保健施設の入所者の施設サービス満足度と抑うつに関連性及び
抑うつに対するリハビリテーション効果の検討

平成 26 年度

坂本 晴美

筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻

【目的】

研究-1

介護老人保健施設（以下、老健）は、特別養護老人ホーム等の老人福祉施設に比べて、医療機関、施設からの在宅復帰や在宅生活支援の架け橋として役割を期待されて来た。しかし、臨床現場ではコスト削減による施設職員の人的資源の不足等により、高齢者の身体面、精神面や活動性の維持、向上に繋げる援助が十分行えず、看護や介護、リハビリテーション（以下、リハ）において問題となっている。しかも、このような状況は、抑うつ症状の発現関連性があるとの報告もある。しかし、その一方で、近年、我が国の社会福祉領域では、サービスの質に対する関心が高まっており、施設サービスの質の向上に向けては、研究が幾つかされているが、抑うつとの関連性を検討しているものはほとんどないのが現状である。

高齢者の抱える問題の中でも、抑うつは認知症と並んで増加傾向にあると指摘されている。厚生労働省の調査によると、平成23年のうつ病（躁うつ病除く）総患者数は、70.4万人にもものぼるとの報告がある。その抑うつの背景として、性別、年齢、経済力、身体疾患、日常生活動作能力などの関連が指摘されている。また、高齢者の抑うつは、若年者に比べて身体的、心氣的訴えや不安、焦燥が目立ち、合わせて、せん妄、妄想、認知障害をきたすことから、早期発見が難しいとされている。さらに、老健などの施設ケアにおいても、入所者の約20%-50%が抑うつであるとされており、これは入所者のもつ身体疾患が誘因となることが示されている。身体機能のみならず、抑うつを適切に評価することは「居室における生活への復帰を目指す」老健において不可欠であると考えられる。

しかし、現在のところ高齢者の施設ケアにおける抑うつに関する研究は少なく、とりわけ老健における入所者の抑うつの経時的変化については明らかにされていない。

三宅は、老健における高齢者が抑うつに陥りやすいことを指摘し、個別的な心理的ケアの必要性を述べている。このことから、高齢者が生活の場として過ごしている施設のサービスと抑うつの関連性について検討することは重要であると考えられる。

そこで本研究は、老健における入所者の施設サービス満足度と施設サービスの構成要因の一つであるリハに対する顧客満足度の関連を把握し、さらに、それらサービス満足度と抑うつに関連性があるのか検討を行うことを目的とした。

研究-2

【研究1】での横断調査に参加した対象者の80.0%が抑うつであり、それに対する特別な対応は行われていなかった。また、95.3%の対象者が服薬による対応もなされていなかったことから、抑うつ進行予防に対する対応をすることは必要であると感じた。さらに、抑うつにある対象者の43.8%が脳卒中後の入所者であった。

我が国における脳卒中患者は、厚生労働省の調査によると、平成23年に、123.5万人との報告がある。さらに、寝たきりの高齢者の約4割、要介護者の約3割を脳卒中患者が占めており、今後さらに高齢化が進む日本において、脳卒中の予防とともに、脳卒中後の後遺症に対する対策も喫緊の課題である。

脳卒中の後遺症の中でうつ病は、脳卒中後うつ病（以下、Post-stroke depression： PSD）として、日常生活動作（以下、ADL）や生活の質（以下、QOL）への悪影響が問題視されており、早期診断、治療を開始することが重要であるといわれている。また、PSDの症状にみられる抑うつは前頭葉機能との関連性が示されている。

抑うつに対する治療法としては、薬物療法に加えて心理療法、認知行動療法、運動療法、経頭蓋刺激磁気刺激などの報告はあるものの、PSD患者に対しては薬物療法以外に、治療効果の報告は少ないのが現状である。また、入所中の機能訓練頻度がADLなど身体機能にかかわる要因と関連があることが示されているが、機能訓練のような介入要因が入所者の抑うつにどのように影響を及ぼしているかについては明確にされていない。そのことから、老健入所者の抑うつに対するリハの治療効果についての報告も少ないのが現状である。

そこで本研究は、1) PSD状態にある老健入所者に対して認知リハを実施し、治療効果を検討すること、2) 認知リハがPSD状態にある入所者の認知機能、ADL、QOLへどのような影響を及ぼすのか検討をすること、3) PSD状態にある入所者の施設サービス満足度及びリハに対する顧客満足度への認知リハの影響を検討することを目的とした。

【対象と方法】

本研究の対象者は、研究-1、研究-2に沿って示した。

研究-1

対象は、茨城県にある老健19施設に入所している入所者及び担当リハ職員とした。入所者の対象者は、病院入院中にリハを経験した100名とした。対象者の抽出は、除外基準に基づき100名に達するまで、担当リハ職員が行った。担当リハ職員は、入所者のリハを担当しているリハ職員である理学療法士、作業療法士とした。

対象者の除外基準は、改訂長谷川式簡易知能評価スケール(以下、HDS-R)19点以下の中等度から重度の認知機能低下者、認知症老人の日常生活自立度判定基準ランクⅣ～Ⅴ該当者、失語症等の高次脳機能障害が認められる者とした。

調査期間は、平成23年3月10日～平成23年11月20日に横断研究として行った。

本研究は、筑波大学人間総合科学研究科倫理委員会により承認されて実施した(承認番号23-45)。また、研究対象者には、書面を用いて実施内容を十分に説明した上で、文書により参加の同意の署名を得て実施した。

調査内容は、入所者に対しては、施設サービス満足度、リハに対する顧客満足度、現状のリハ状況やそれに対する満足度、入所目的や退所目標、抑うつに対する評価として老年期うつ病評価尺度(15項目)(以下、GDS)等の調査を実施した。入所者の担当リハ職員へは、入所者の年齢、性別等の基本属性や社会的背景、疾病、服薬状況、リハの現状、ADL等について調査を実施した。

統計学的解析には、施設サービス満足度とリハに対する顧客満足度等との関連性、また、それらサービス満足度と抑うつ(GDS)の関連性について、Spearmanの順位相関検定を用いた。また、施設サービス満足度、リハに対する顧客満足度及び抑うつ(GDS)を従属変数とし、Spearmanの順位

相関検定により、有意差が得られた各項目を独立変数として投入し、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。なお、統計解析には、統計解析ソフト SPSS ver. 19を用い、いずれも有意水準は5%とした。

研究-2

茨城県内の老健に入所している、PSD 状態にある入所者を 8 名対象とした。また、「PSD 状態」とは、以下の対象基準のすべての項目を満たした者とした。

すなわち、脳血管障害の既往がある者、精神疾患の診断・統計マニュアル(第 4 版)(DSM-IV)の気分障害のカテゴリーの項目にある症状に 2 つ以上該当する者、GDS5 点以上のうつ傾向にある者、Zung Self Depression Scale(以下、SDS)40 点以上 59 点以下である。

除外基準は、抗うつ薬を服用している者、HDS-R19 点以下の中等度から重度の認知機能低下者、認知症老人の日常生活自立度判定基準ランクⅣ～Ⅴ該当者、失語症等の高次脳機能障害が認められる者とした。

介入は、平成 25 年 12 月 11 日から平成 26 年 8 月 15 日の期間に実施した。

本研究は、筑波大学医の倫理委員会の承認(第 816 号)を得て実施した。また、研究対象者には、書面を用いて実施内容を十分に説明した上で文書にて参加の同意の署名を得て実施した。

調査内容は、年齢、性別等の基本属性、疾患、現状のリハについて、ADL 状況等に加えて、神経心理学的所見として、HDS-R・Mini-Mental State Examination(以下、MMSE)、前頭葉機能検査(以下、FAB)、Training Making Test part-A、B(以下、TMT)、抑うつに関する評価として、GDS・SDS・脳卒中うつスケール(以下、JSS-D)を用いた。また、ADL の評価は Barthel Index(以下、BI)、生活の質の評価は、SF-8 にて行った。その他、施設サービス満足度、リハに対する顧客満足度について調査した。

介入内容は、通常、老健で行われているリハ(運動療法を主とした機能訓練)に加えて、認知課題である、数唱、逆唱、ストループテスト、仮名ひろいテスト、減算課題の認知リハを週 3 回、20 分/回行い、それを 3 カ月間実施した。

統計学的解析には、認知リハ実施前、実施後の比較には、ウィルコクソンの符号順位検定及びマクネマー検定を用いた。なお、統計解析には、統計解析ソフト SPSS ver.19 を用い、いずれも有意水準 5%とした。

【結果】

本研究の結果は、研究-1、研究-2 に沿って示した。

研究-1

施設サービス満足度とリハに対する顧客満足度は関連し、また、それらサービス満足度と抑うつは関連していた。

研究-2

PSD 状態にある入所者に対して、認知リハを実施した結果、前頭葉機能評価の指標である FAB

得点や抑うつ評価指標である、GDS、SDS、JSS-D 得点の向上が認められ、介入前と比較して、有意な差が得られた。また、リハに対する顧客満足度総合得点、QOL の全体的健康感、社会生活機能が向上した。

【考察】

研究-1

施設サービス満足度とリハに対する顧客満足度は関連しており、さらに、それらサービス満足度と抑うつとの関連が示された。このことから、施設サービス満足度向上の為には、抑うつに対する働きかけが重要だと考えられる。

研究-2

本研究の認知リハは、抑うつに一定の効果があり、その機構は、前頭葉機能の賦活を介している可能性が考えられた。また、意欲づけや自発性といった機能は前頭前野内側部が関与していることから、今回の認知リハに対する顧客満足度向上の背景に、前頭葉機能の賦活が関連する可能性が推察される。しかし、抑うつ、リハに対する顧客満足度、QOL については、リハ頻度が増えたことによる介入効果も考慮しなければならないと思われ、更なる検証が必要と考えられる。

【結論】

施設サービス満足度とリハに対する顧客満足度は関連し、また、それらサービス満足度と抑うつは関連していた。そして、PSD 状態にある老健入所者に対する認知リハは、抑うつに一定の効果があり、その機構は、前頭葉機能の賦活を介している可能性が考えられた。また、意欲づけや自発性といった機能は前頭前野内側部が関与していることから、今回の認知リハに対する顧客満足度向上の背景に、前頭葉機能の賦活が関連する可能性が推察される。しかし、抑うつ、リハに対する顧客満足度、QOL については、リハ頻度が増えたことによる介入効果も考慮しなければならないと思われ、更なる検証が必要と考えられる。